ルイ・ディエメによるラモー作品の編纂
――ラモーの初版とメローによる編纂との比較を通して――

Diémer's Revision of Rameau's Works
: Through a Comparison between the first Edition and Méreaux's Revision

伊 東 茉 帆
Ito Maho

はじめに

本論考では、ルイ＝ジョゼフ・ディエメ Louis-Joseph Diémer（1843-1919）編纂の『フランスのクラヴサン奏者たち *Les Clavecinistes français*』[1]（以下、「ディエメ本」と示す）からジャン＝フィリップ・ラモー Jean-Philippe Rameau（1683-1764）の作品を取り上げ、ラモー作品におけるルイ・ディエメの編纂方針を考察することを目的としている。研究方法は、ラモーの初版と「ディエメ本」におけるラモー作品の楽譜を比較し、ルイ・ディエメが初版から書き加えた点や初版と異なる点を整理する。その上で、最後にジャン＝アメデ・ル・フロワ・ド・メロー Jean-Amédée Le Froid de Méreaux（1802-1874）の全 3 巻または分冊の全 52 巻からなる『1637 年から 1790 年までのクラヴサン奏者たち *Les Clavecinistes de 1637 à 1790*』[2]（以下、「メロー本」と示す）を「ディエメ本」と比較検討する。

19 世紀中頃のフランスでは、古楽復興の動きが盛んになっていき、17 世紀、18 世紀、19 世紀前半の作曲家の鍵盤作品集が刊行されるようになった。音楽学者のエリスは、主な鍵盤作品集として、フランソワ・デルサルト François Delsarte（1811-1871）とロジーヌ・デルサルト Rosine Delsarte（1817-1891）編纂による全 3 巻からなる『歌の古資料 *Archives du chant*』[3]、アリスティド・ファランク Aristide Farrenc（1794-1865）とルイーズ・ファランク Louise Farrenc（1804-1875）編纂による全 23 巻からなる『ピアニストたちの宝 *le Trésor des Pianistes*』[4]（以下、「ファランク本」と示す）、「メロー本」、「ディエメ本」を挙げている（Ellis 2005,47-48）。その後、カミーユ・サン=サーンス Camille Saint-Saëns（1835-1921）もラモーの作品を編纂し、全 18 巻からなる『ラモー全集 *Œuvres complètes*』[5]を出版した。『ラモー全集』第 1 巻のシャルル・テオドール・マルエルブ Charles Théodore Malherbe

[1] Diémer, Louis. *Les Clavecinistes français.* Paris: Durand&Schoenewerk (vol. 1); A. Durand&fils (vol. 2-4), 1887-1912.
[2] Méreaux, Amédée. *Les Clavecinistes de 1637 à 1790.* Paris: Heugel, 1864-1867.
[3] Delsarte, François. *Archives du chant.* Paris: F.Delsarte, 1855-1864.
[4] Farrenc, Aristide, and Louise Farrenc. *Le trésor des pianistes.* Paris: Farrenc, 1861-1872.
[5] Rameau, Jean-Philippe. 1895-1924. *Œuvres complétes*. Publées sous la direction de C. Saint-Saëns.Paris: Durand&Fils. 『ラモー全集』は、1895 年～1924 年に全 18 巻がデュラン社から刊行されたが未完であり、ベーレンライター Bärenreiter 社から新全集が刊行中である。

（1853-1911）による書誌情報には、「フランスでは、ファランク、ポワゾ（シェーネンベルガー Schonenberger 社[6]出版）、メロー、ディエメ（デュラン Durand 社出版）があり、様々な利点でおすすめである。」（Marherbe 1895, XXIX）[7]（筆者訳）と記されていることから、先で述べた鍵盤作品集は後世にも重要な役割を果たしていたことが窺える。そして、「ファランク本」、「メロー本」、「ディエメ本」の『ラモー全集』は、各楽譜集の解説文から、モダン楽器[8]（ピアノ）で演奏することを想定して編纂された。

1. ルイ・ディエメ、及び「ディエメ本」の概要

1-1. ルイ・ディエメについて

ルイ・ディエメはフランスのピアニスト、作曲家である。1853 年にパリ音楽院に入学し、ソルフェージュ部門（1855 年）、ピアノ部門（1856 年）、和声と伴奏部門（1859 年）、対位法とフーガ部門（1861 年）で一等賞を受賞した。また、オルガン部門（1861 年）でも二等賞を受賞した。彼は、ヴァイオリン奏者のジャン＝デルファン・アラール Jean-Delphin Alard（1815-1888）が主催する室内楽コンサートに出演し、ヴァイオリン奏者のパブロ・デ・サラサーテ Pablo de Sarasate（1844-1908）とツアーを行うなど、演奏家としての名声を高めた（Timbrell, 2001）[9]。

また、彼はクラヴサンの演奏においても先駆的な役割を果たした。1889 年のパリ万博において、ルイ 15、16 世の宮廷で活躍した製作家のパスカル＝ジョゼフ・タスカン 1 世 Pascal-Joseph Taskin Ⅰ（1723-1793）が製作したフレンチ・タイプ（1769 年製作）のクラヴサンを演奏し、成功を収めた。この成功により、ディエメと、パリ音楽院教授でチェロ奏者のジュール・デルサルト Jules Delsart（1844-1900）、ヴァイオリン奏者のルイ・ヴァン・ヴェーフェルゲム Louis Van Waefelghem（1840-1908）は〈古楽器協会 Sociéte des Instruments Anciens〉を設立し、古楽器を使用してフランス、ベルギー、イギリス、スイスなどで積極的に演奏活動を行った。この協会は、定期的な活動を行った世界初の古楽器演奏団体となった（井上 2009, 299-301）。

1-2. 「ディエメ本」について

「ディエメ本」は、1887 年から 1912 年までに、デュラン＆シェーネヴェルク社（第 1

[6] デュラン＆シェーネヴェルク Durand&Schoenewerk 社だと思われる。
[7] 『ラモー全集』第 1 巻のマルエルブによる解説部分からの引用である。
[8] 当時使われていた楽器は、グランド・ピアノ、アップライト・ピアノなど様々な形態が想定できるため、本論考ではモダン楽器（ピアノ）と総称する。
[9] https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/display/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000007754?rskey=UoO6CG&result=1（2023 年 5 月 10 日閲覧）

巻）とデュラン A. Durand&fils 社（第 2 巻〜第 4 巻）から全 4 巻として刊行された。第 1 巻〜第 3 巻に所収されている曲目は全てディエメによる編纂で、第 4 巻に所収されている曲目は、サン=サーンス、ヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy（1851-1931）、ポール・デュカス Paul Dukas（1865-1935）、ギルマン、フェルナンド・ドゥ・ラ・トンベル Fernad de La Tombelle（1854-1928）、テオドール・ドゥ・ラジャルテ Théodore de Lajarte（1826-1890）、ジョージ・マーティー Georges Marty（1860-1908）が編纂した。

第 1 巻には、フランソワ・クープラン François Couperin（1668-1733）、ルイ＝クロード・ダカン Louis-Claude Daquin（1694-1771）、ラモー、第 2 巻には、フランソワ・ダジャンクール François d'Agincour（1684-1758）、ジャン＝フランソワ・ダンドリュー Jean-François Dandrieu（1682-1738）、ダカン、ジャン＝バティスト・ルイエ Jean-Baptiste Lœillet（1680-1730）の作品、第 3 巻には全て F.クープランの作品、第 4 巻には、ジャック・シャンピオン・ド・シャンボニエール Jacques Champion de Chambonnières（1601/1602-1672）、アンドレ・カルディナル・デトゥーシュ André Cardinal Destouches（1672-1749）、ジャック・デュフリ Jacques Du Phly（1715-1789）、ミシェル＝リシャール・ド・ラランド Michel Richard de Lalande（1657-1726）、ジャン＝バティスト・リュリ Jean-Baptiste Lully（1632-1687）、マラン・マレ Marin Marais（1656-1728）、ラモー、ジョゼフ＝ニコラ＝パンクラス・ロワイエ Joseph-Nicolas-Pancrace Royer（1703-1755）の作品が所収されている。

1-3. ディエメが編纂したラモー作品

「ディエメ本」の第 1 巻は、全 20 曲から成っている。第 1 曲目〜第 8 曲目に F.クープランの作品、第 9 曲目、第 10 曲目にはダカンの作品が載せられている。そして、第 11 曲目〜第 20 曲目は、ラモーの作品であり、彼の 2 つの曲集、すなわち『クラヴサン曲集と運指法 *Pièces de clavecin avec mèthode sur la mécanique des doigts*』（1724）と『新クラヴサン曲集 *Nouvelles Suites de Pièces de Clavecin*』（1728）から 10 曲が選ばれている。彼が取り上げた作品をまとめたのが以下の【表 1】である。

【表 1】『フランスのクラヴサン奏者たち』第 1 巻におけるラモー作品一覧表

通し番号	曲名	元となったラモーの曲集と作品番号
11.	〈小鳥のさえずり *Le Rappel des Oiseaux*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Mi min: RCT[10] 2 no.4
12.	〈ミュゼット　ロンド形式 *Musette en rondeau*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Mi min: RCT 2 no.7
13.	〈優しい訴え *Les Tendres plaintres*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Ré maj: RCT 3 no.1
14.	〈ソローニュの雛鳥 *Les Niais de Sologne*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Ré maj: RCT 3 no.2
15.	〈ため息 *Les Soupirs*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Ré maj: RCT 3 no.3
16.	〈つむじ風 *Les Tourbillons*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Ré maj: RCT 3 no.7
17.	〈一つ目の巨人 *Les Cyclopes*〉	『クラヴサン曲集と運指法』 Suite en Ré maj: RCT 3 no.8
18.	〈ガヴォット *Gavotte*〉	『新クラヴサン曲集』 Suite en La min : RCT 5 no.7
19.	〈雌鳥 *La Poule*〉	『新クラヴサン曲集』 Suite en Sol maj : RCT 6 no.4
20.	〈エジプト人 *L'Égyptienne*〉	『新クラヴサン曲集』 Suite en Sol maj : RCT 6 no.8

（「ディエメ本」に基づいて筆者作成）

2. 「ディエメ本」のラモー作品における編纂方針について

2-1. 初版と「ディエメ本」の相違点

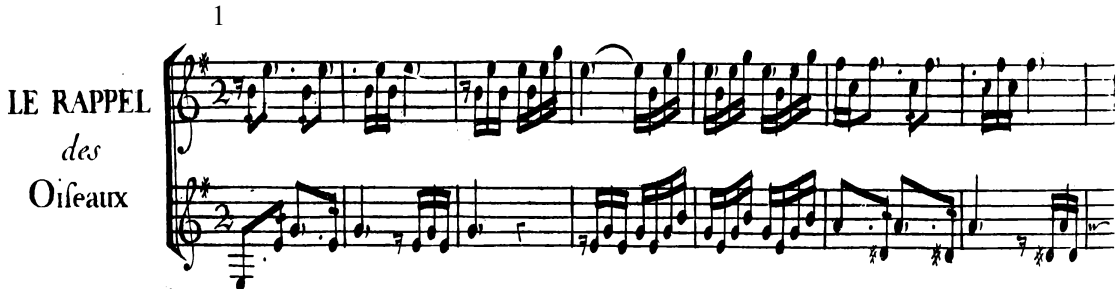
「ディエメ本」は、ラモーの初版に加筆している点が見られる。そこで本論考では、ディエメがラモー作品の 1 曲目として取り上げた〈小鳥のさえずり〉と、〈小鳥のさえずり〉では見られなかったディエメの加筆を確認できる〈一つ目の巨人〉の 2 曲を取り上げる。これらの楽曲の初版と「ディエメ本」を比較し、検証していく。

[10] S. Bouissou, and D. Herlin. 2003. *J. -Ph. Rameau. Catalogue thématique des œuvres musicales, Tome 2 : Livrets*. Paris: CNRS Éditions. に基づいたラモー作品番号を使用する。

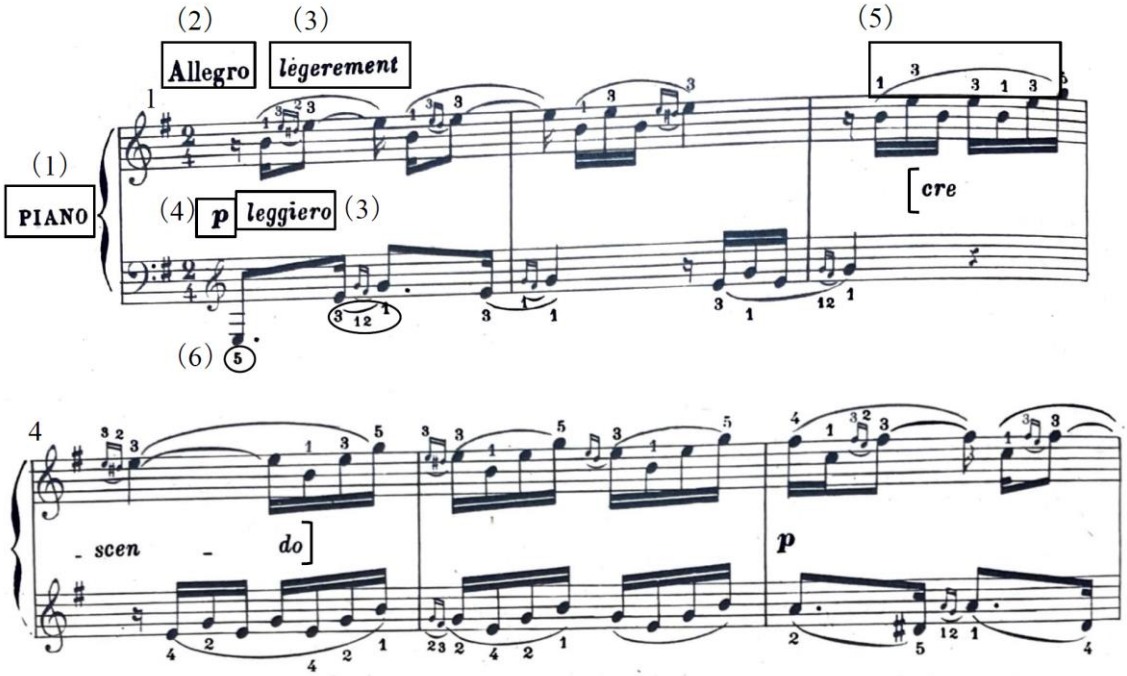
○〈小鳥のさえずり〉

まず、曲の冒頭部分を見てみると、装飾音記号しか記されていない初版に対して、「ディエメ本」は、様々な表記を加えていることがわかる。「ディエメ本」が書き加えている点を整理する【譜例 1】【譜例 2】。

【譜例 1】ラモー（初版）:〈小鳥のさえずり〉1〜7 小節



【譜例 2】ラモー（「ディエメ本」）:〈小鳥のさえずり〉1〜6 小節



初版は、〈クラヴサン曲集〉という題名であることと、『クラヴサン曲集と運指法』において、ラモー自身がクラヴサンの指針を示していることからも、この楽曲はクラヴサンで演奏されることが想定されるが、「ディエメ本」では、曲の始めに PIANO（譜例中（1））と楽器表記がある。

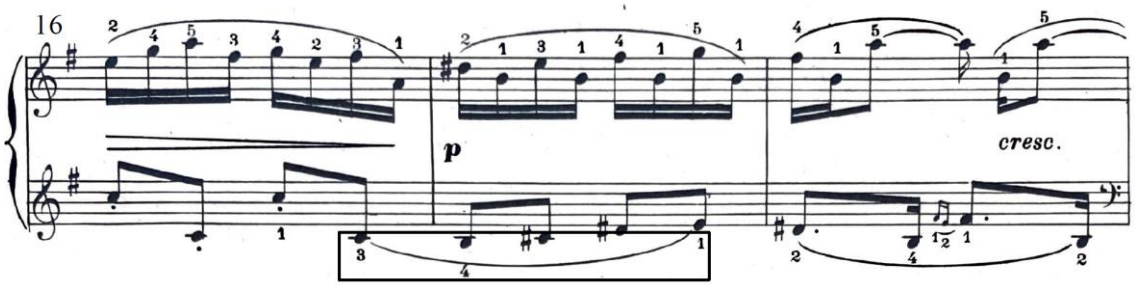
「ディエメ本」では、曲の冒頭に Allegro légèrement（譜例中（2）と（3））という速度表記と発想記号が書いてあり、1 小節目にも *p*（譜例中（4））、leggiero（譜例中（3））という

強弱記号と発想記号が記されている。これは、〈小鳥のさえずり〉という題名のため、小鳥をイメージした音量と軽さを示していると考えられる。

初版には強弱記号は全く書かれていないが、「ディエメ本」には非常に細かく *p* や *f*、cresc. と dimin. の指示が書かれている。クラヴサンにおける演奏は、使用する楽器によって何段階かの音量の組み合わせを作ることが可能になるため、多少の音量の変化を付けることができる。しかし、打鍵や指のコントロールによって音量の変化を付けることは不可能なため、dimin. や cresc. を表現することは難しい。

〈小鳥のさえずり〉において、「ディエメ本」では、スタッカートの音符以外の全ての音符にスラーが付けられ、フレーズ分けされている（譜例中（5））。初版では、この冒頭部分において、スラーやフレーズの指示は全くないため、指示のない部分は演奏者の裁量によってレガートでもノン・レガートでも演奏することができる。フレーズの取り方について、「ディエメ本」では、小節を跨いでフレーズが繋がれていることは少ないが、冒頭の 1〜3 小節目の左手の音形や、その他の順次進行で進むフレーズの場合に、小節を跨いでスラーが付けられている部分がある【譜例 3】。

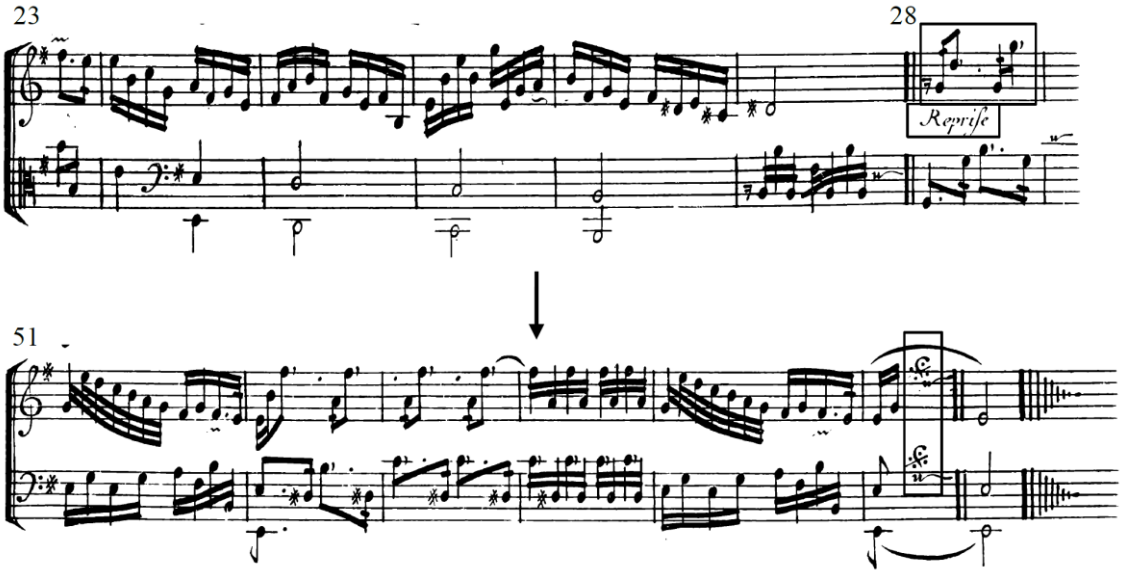
【譜例 3】ラモー（「ディエメ本」）：〈小鳥のさえずり〉16〜18 小節



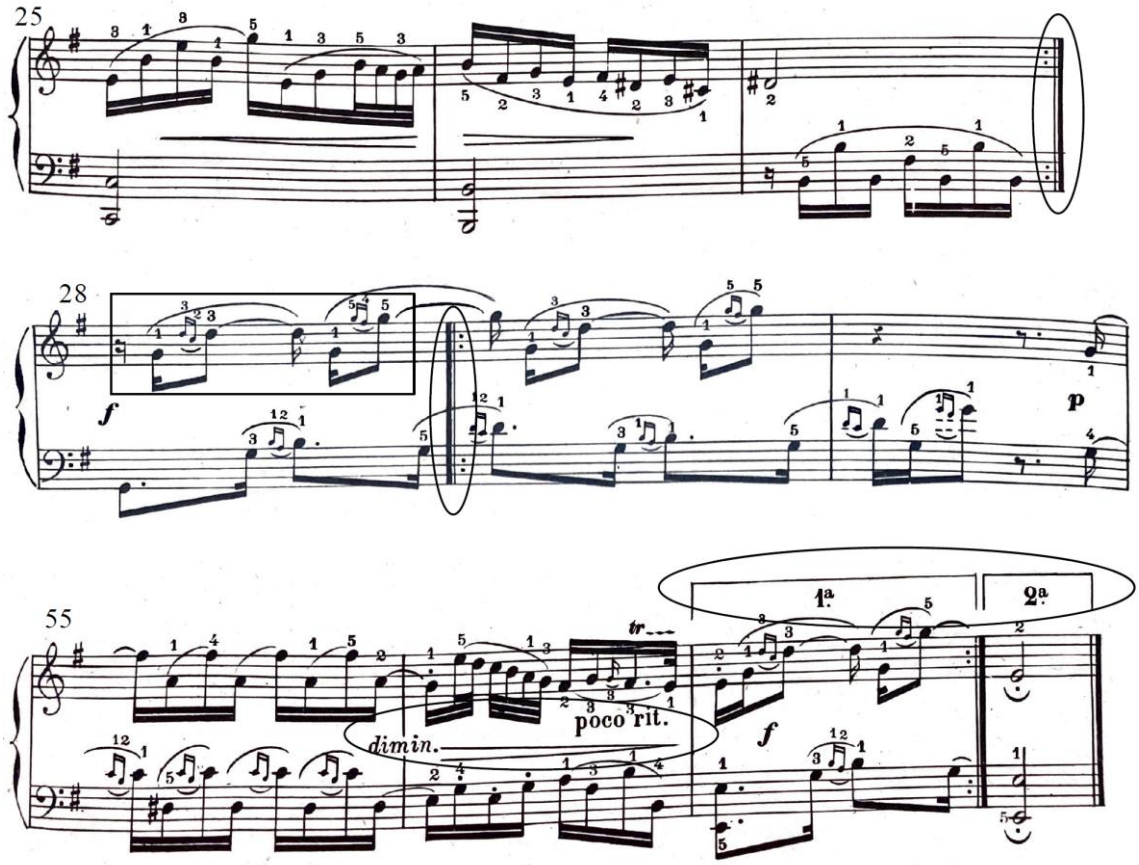
初版には運指が全く書かれていない。一方、「ディエメ本」では、反復の音形部分には運指の指示が省かれているが、それ以外の音符には全て記されているため、愛好家でも演奏しやすいように配慮されていることが窺える（譜例中（6））。

繰り返しの表記について、初版では、Reprise（レプリーズ）という指示や、セーニョ記号で書かれているが、「ディエメ本」では、1 カッコ、2 カッコの繰り返し記号に書き換えられている【譜例 4】【譜例 5】。

【譜例 4】ラモー（初版）：〈小鳥のさえずり〉23～28 小節、51～57 小節



【譜例 5】ラモー（「ディエメ本」）：〈小鳥のさえずり〉25～30 小節、55～58 小節



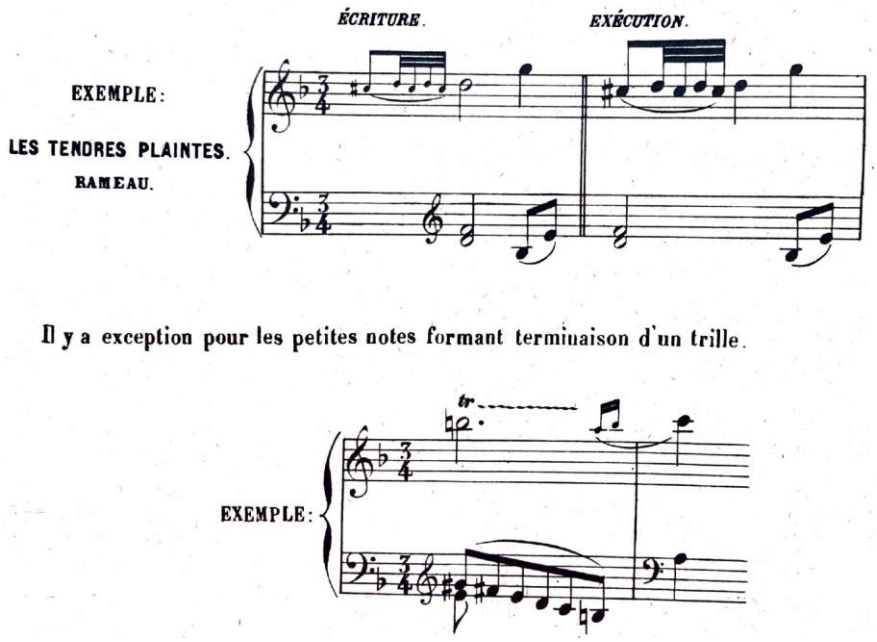
「ディエメ本」では、56 小節目から dimin. と poco rit. が指示され、終止音にはフェル

マータが付けられている。クラヴサンを演奏する際に、クレッシェンドやディミヌエンドなど、徐々に音量を増やすことや減らすことはできないが、フレーズを収める際の装飾音を丁寧に弾くために遅く演奏する場合がある。したがって、ディエメはフレーズを収めるためにフェルマータを記譜したと考えられる。

また、28 小節目の右手について、初版の記譜に対して、「ディエメ本」ではすぐにリズムを理解しやすくタイを用いて書き換えられており、ここにもディエメの工夫が感じられる。

次に、装飾音について見ていく。ディエメは、第 1 巻の冒頭部分に装飾音の演奏法について以下のように記している【譜例 6】。

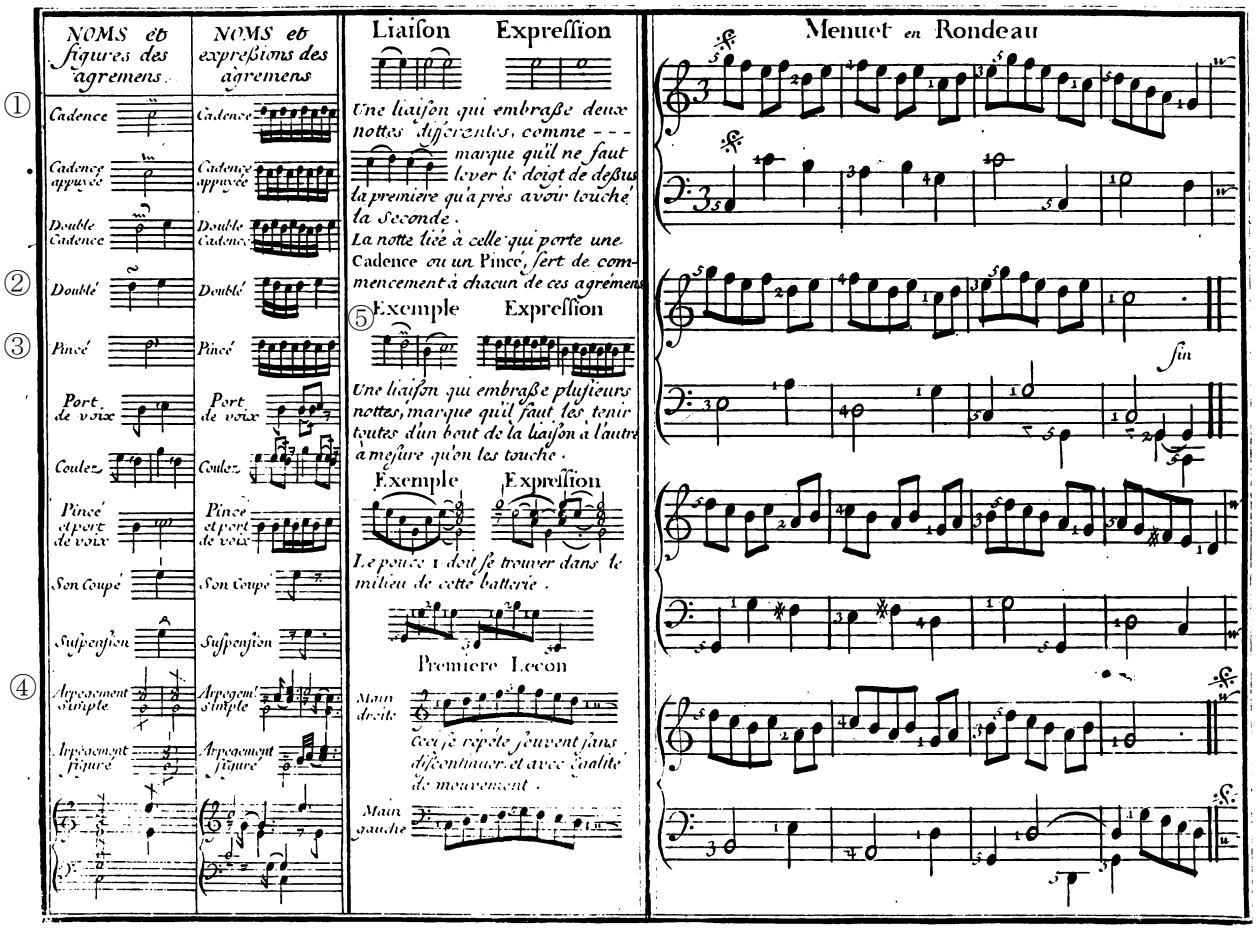
【譜例 6】「ディエメ本」1 ページ目



1 つ目の譜例には、装飾音は拍頭に演奏し、装飾音が付いている音符の音価は、装飾音の音価分を減らして演奏するという指示が書かれている。2 つ目の譜例には、トリルの終わりに付く 16 分音符（後打音）は、例外として、この譜例で記譜されているように、次の小節の拍前に演奏するという指示が書かれている。

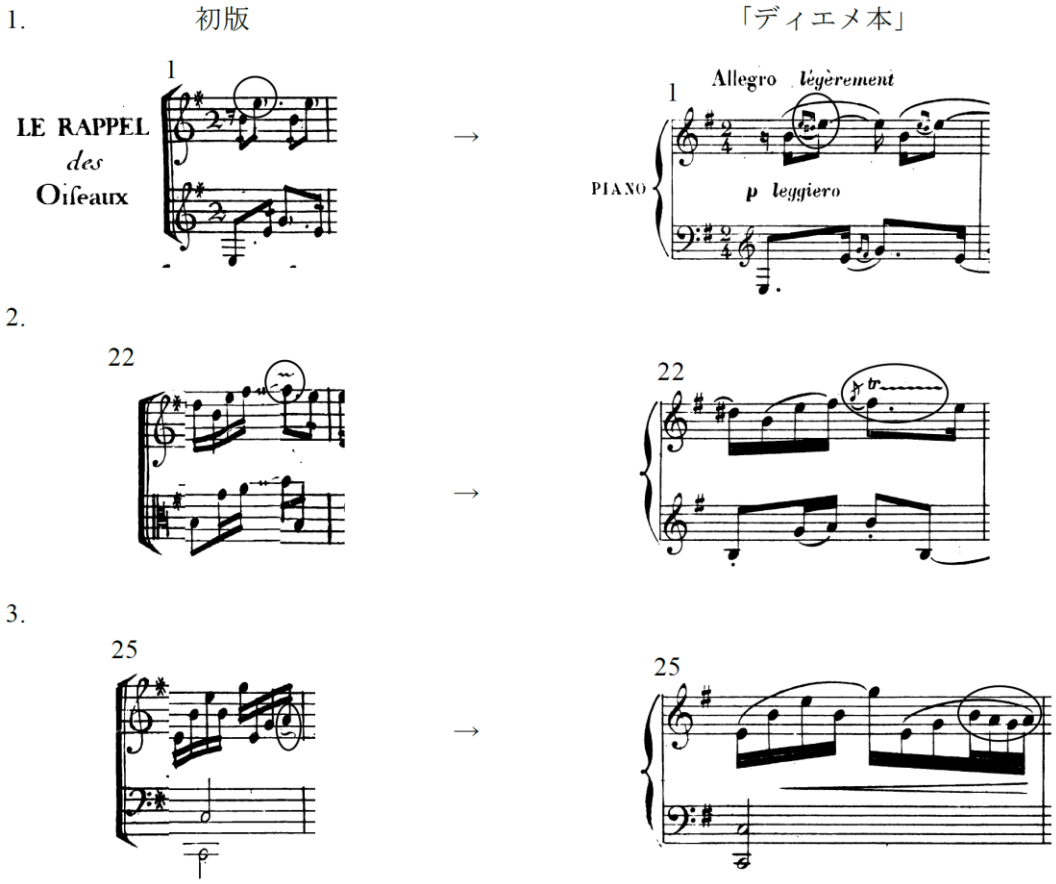
18 世紀以前における装飾音は、時代や国、作曲家によって表記や演奏法が異なり、作曲家自身による装飾音表が曲集の中で載せられていることがあった。ラモーも『クラヴサン曲集と運指法』の解説部分に、装飾音記号と実際の演奏法を記した装飾音表を載せている【資料 1】。

【資料 1】ラモー：『クラヴサン曲集と運指法』解説部分



ディエメは、ラモーの装飾音表に則って、装飾音を実際の音符と音価や *tr* 記号を使って示している。ここで、〈小鳥のさえずり〉における装飾音の処理の方法を見ていく。〈小鳥のさえずり〉の中で使われている 3 種類の装飾音を比較したのが次の【資料 2】である。

【資料 2】ラモー：〈小鳥のさえずり〉の初版と「ディエメ本」における装飾音



1 つ目は、ラモーの装飾音表の③にあたる Pincé（パンセ）と呼ばれる装飾音で、現代[11]のモルデントと同じ意味である。ラモーの装飾音表では 2 分音符が載せられているため、2 分音符の音価いっぱい演奏するが、〈小鳥のさえずり〉では 8 分音符に付けられている。「ディエメ本」では、実際の音符の前打音で書かれている。

2 つ目は、ラモーの装飾音表の①にあたる Cadence（カダンス）と呼ばれる装飾音で、現代では上からかけるトリルの意味である。「ディエメ本」では、トリルのかかる音の 2 度上の音符が短前打音として tr 記号に付けられている。

3 つ目は、ラモーの装飾音表の②にあたる Doublé（ドゥブレ）と呼ばれる装飾音で、現代のターンと同じ意味である。「ディエメ本」では、実際の音符と音価で書かれている。

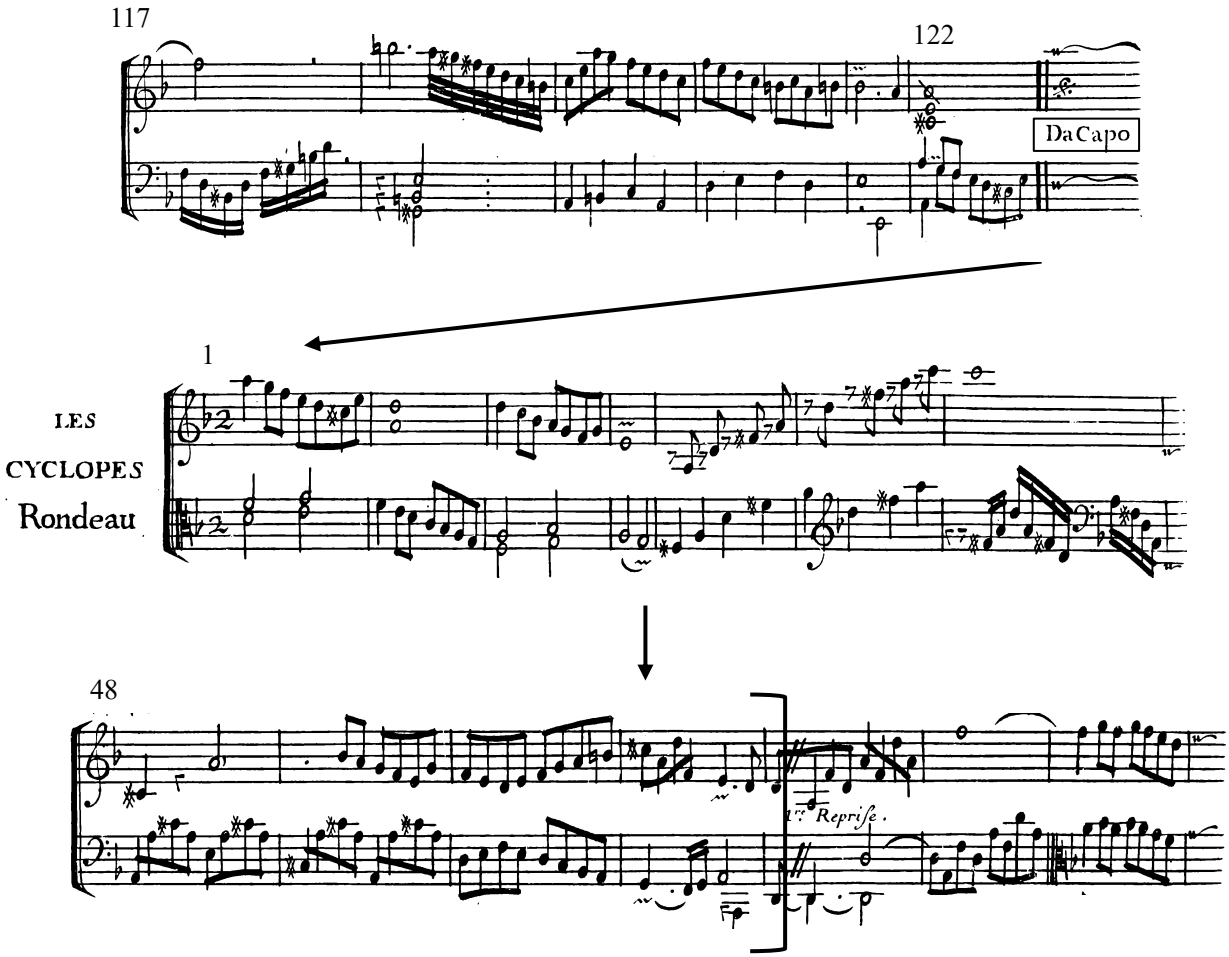
[11] 19 世紀前半の教則本（フランソワ・ジョゼフ・フェティス François-Joseph Fétis（1784-1871）とイグナーツ・モシュレス Ignaz Moscheles（1794-1870）の共著『ピアノ演奏法の手引き *Méthode des méthodes de piano*』（1840）など）では、装飾音の示し方や記譜法が現在と変わらないため、本論考では 19 世紀前半から現在までを称して現代とする。

○〈一つ目の巨人〉

ここまで、〈小鳥のさえずり〉において、『ディエメ本』が初版から書き加えた点を見てきたが、〈一つ目の巨人〉についても、〈小鳥のさえずり〉とは異なり、且つ、特筆すべき点において、以下で検証する。

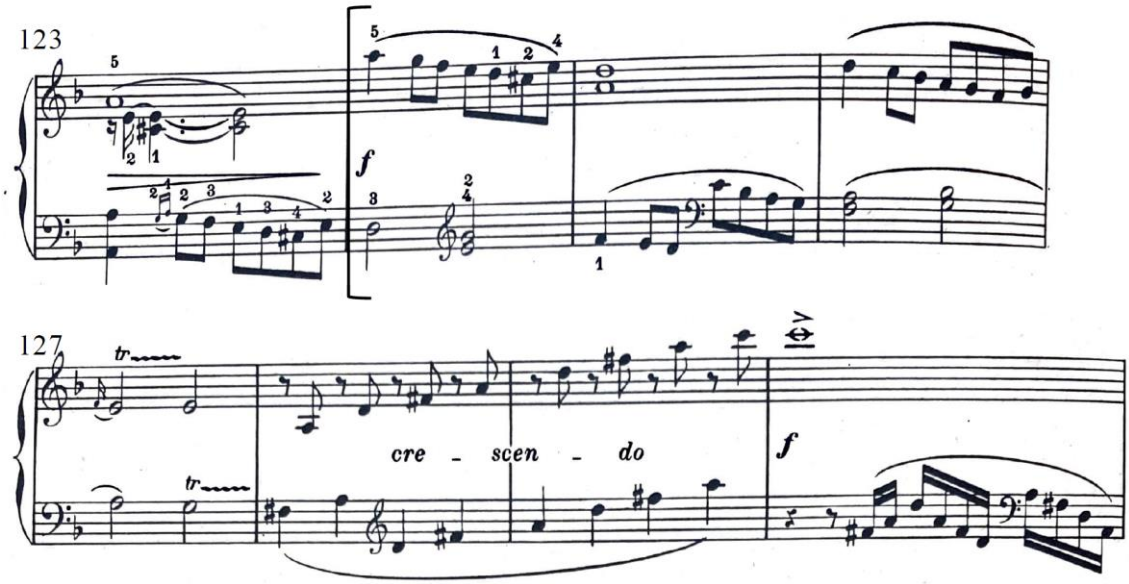
まず、繰り返しの表記について見ていく。〈一つ目の巨人〉はロンド形式で、122 小節目の後に Da Capo（ダ・カーポ）ではじめのロンド主題に戻り、51 小節目で終わる【譜例 7】。

【譜例 7】ラモー（初版）:〈一つ目の巨人〉117〜123 小節、1〜7 小節、48〜54 小節



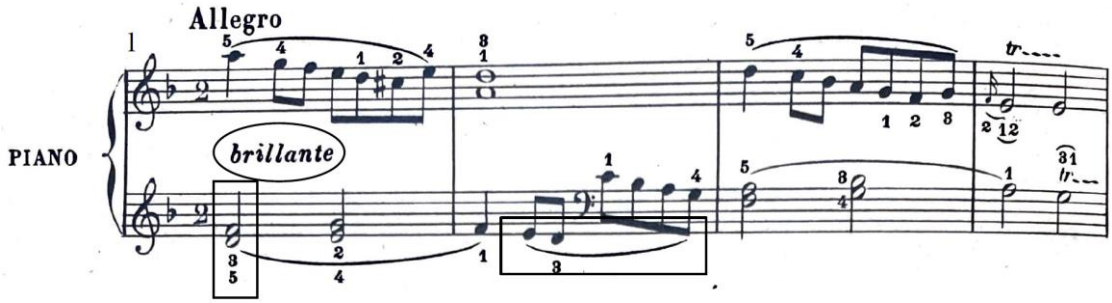
一方、「ディエメ本」では、Da Capo は使わずに、はじめのロンド主題も全て記譜されている【譜例 8】。

【譜例 8】ラモー（「ディエメ本」）：〈一つ目の巨人〉123〜130 小節（Da Capo 部分のロンド主題）

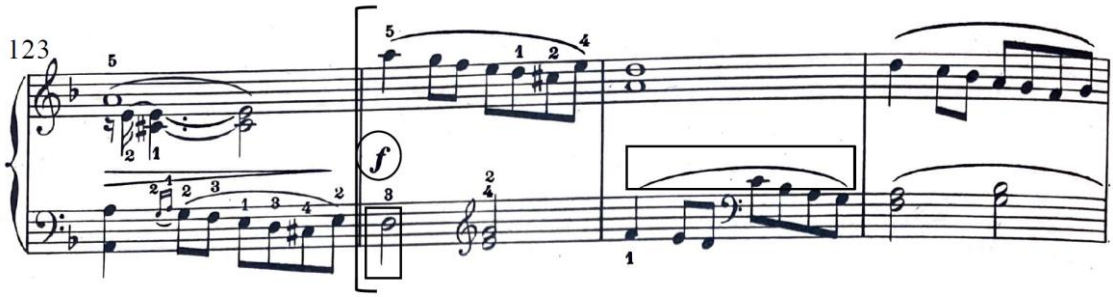


また、124 小節目からの Da Capo のロンド主題には、冒頭のロンド主題に書かれていたスラーや強弱記号とは異なる部分がある。それは、冒頭のロンド主題である 1 小節目では brillante と表記されているが、124 小節目には *f* と書かれていて、2 小節目の左手のアーティキュレーションは 125 小節目と変わっている【譜例 9】【譜例 10】。

【譜例 9】ラモー（「ディエメ本」）：〈一つ目の巨人〉1〜4 小節



【譜例 10】ラモー（「ディエメ本」）：〈一つ目の巨人〉123〜126 小節（Da Capo 部分のロンド主題）

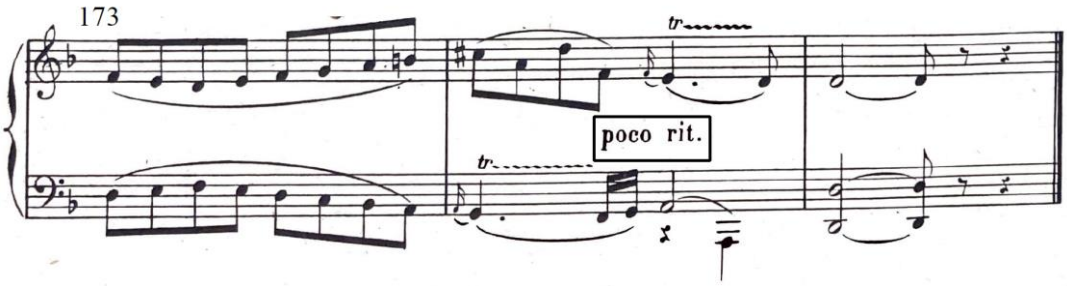


123 小節目にデクレッシェンドでフレーズが締められているため、124 小節目から再びロンド主題に戻ったということを示すために、1 小節目の brillante ではなく、*f* が指示されていると考えられる。

2 小節目と 125 小節目の左手のアーティキュレーションが変わっている点について、124 小節目の 1 拍目の音が、冒頭 1 小節目の 1 拍目の音と変わっているため、フレーズの取り方が変わり、便宜上、アーティキュレーションが変更されていると推察できる。

さらに、Da Capo のロンド主題の最後にのみ poco rit. が加えられ、曲の終結が示されている【譜例 11】。

【譜例 11】ラモー（「ディエメ本」）：〈一つ目の巨人〉173〜175 小節



〈一つ目の巨人〉で使われている中から 2 種類の装飾音を比較したのが次の【資料 3】である。

1 つ目の右手は、全音符に付けられているカダンスで、「ディエメ本」では前打音と *tr* 記号で示されている。また、初版の全音符は 2 分音符 2 つに分けられていて、2 つ目の 2 分音符にはトリルが付けられていない。左手は、ラモーの装飾音表の⑤にあたるもので、カダンスにスラーがついている場合は、カダンスはその音からトリルをするという意味である（【資料 1】参照）。「ディエメ本」では *tr* 記号のみで示されている。

【資料 3】ラモー：〈一つ目の巨人〉における初版と「ディエメ本」の装飾音について

1.　　初版　　「ディエメ本」

2.

2 つ目は、ラモーの装飾音表の④にあたる Arpegement Simple（アルペジュマン・サンプル）と呼ばれる記号で、この斜線の向きの場合は、上からアルペジオで和音を演奏する。ディエメの時代では使われていない記号のため、「ディエメ本」では、実際の音符と音価で記譜されている。

2-2. ディエメが書き加えた点

ラモーの初版と「ディエメ本」の楽譜を比較、検証したことで、ディエメが初版から加筆した点を多く見ることができた。筆者は、それらを 8 つに分類した【表 2】。

【表 2】ディエメが書き加えた点（「ディエメ本」の楽譜部分から筆者作成）

1.	曲の始めに PIANO と楽器指定が書いてある。
2.	速度表記がある。
3.	発想記号が書かれている。
4.	強弱記号が書かれている。
5.	アーティキュレーション（スラー、フレーズ）が書かれている。
6.	運指が付けられている。
7.	繰り返し記号、1 カッコ、2 カッコの表記がある。
8.	装飾音が実際の音符と音価または前打音で記譜されている部分がある。

2-3. 「メロー本」から見る「ディエメ本」の特徴

「メロー本」は、1637 年から 1790 年までのクラヴサン奏者[12]の鍵盤作品を、アメデ・メローが編纂し、ウジェル Heugel 社から出版した鍵盤作品楽譜集である。アメデ・メローは、ヴィルトゥオーゾ・ピアニスト、教師として成功したのち、1835 年に楽譜出版と音楽記事の出版と教育を組み合わせた仕事を始め、ルーアンとパリで〈歴史的演奏会〉[13]を開いている[14]。

「メロー本」に所収されているラモーの作品は 17 曲あり、ここでは、先で見てきた〈一つ目の巨人〉[15]の冒頭部分を検証し、そこから見える「ディエメ本」の特徴を考察する。メローとディエメが初版から楽譜上に加筆した点は、速度表記、発想記号、強弱記号、アーティキュレーション、運指、繰り返し記号など、ほとんど同じであり、「メロー本」には曲の初めに PIANO の楽器指定が書かれていないだけである。ラモーの初版では指示がない冒頭の速度表記、発想記号について、メロー、ディエメともに同じ指示を記している。また、他の曲においても、冒頭にメローとディエメが同じ速度表記、発想記号を示している曲が多かった。これは、ディエメが「メロー本」を参考にしていた可能性が考えられる。

しかし、「ディエメ本」は、「メロー本」とは指示の重点の置き方が異なっている【譜例 12】【譜例 13】。

---

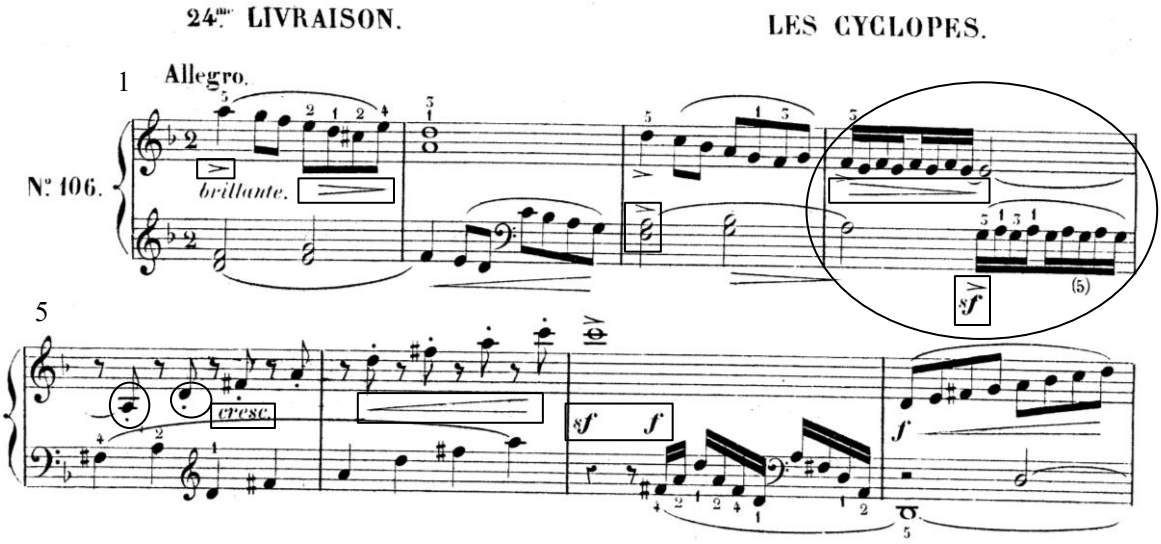
[12] 当時の作曲家はクラヴサン（チェンバロ）も演奏することができるのが通例であった。

[13] ルーアンで 9 回（1842-1843）とパリ（1844）で開き、フランスの聴衆に馴染みのある曲と、まだ知られていない過去の作品を演奏した。

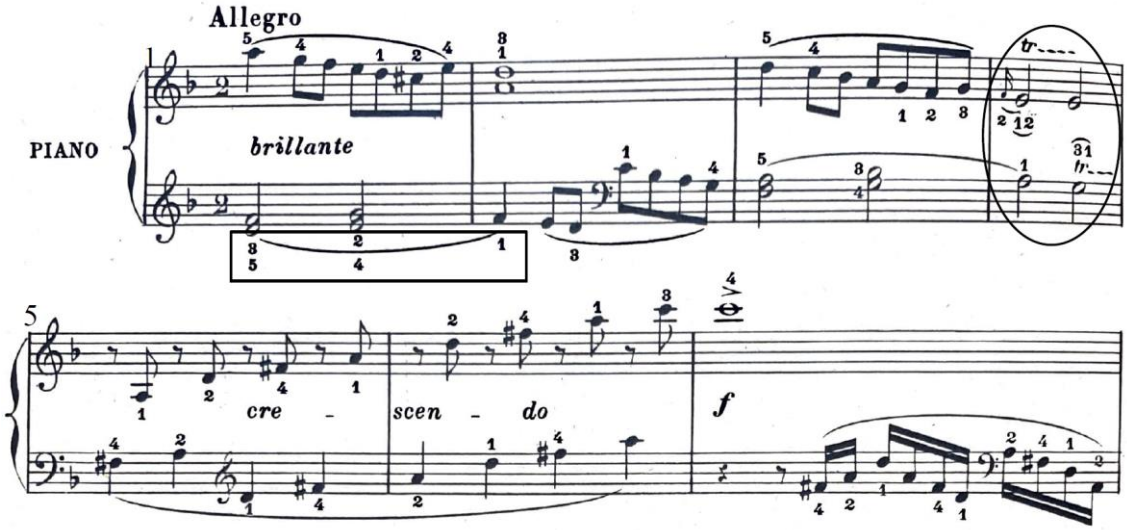
[14] 19 世紀後半になると、裕福な市民層が拡大したことにより、社会にピアノが普及した。そのため、市民たちが過去の音楽を通してピアノ教育を受けるにあたって、この楽譜集は重要な役割を果たした。その他、「メロー本」の詳細については、伊東茉帆　2022　「ラモー作品におけるアメデ・メローの編纂方針について–メロー編纂《1637 年から 1790 年までのクラヴサン奏者たち *Les Clavecinistes de 1637 à 1790*》の解説文を参考に–」を参照。

[15] 〈一つ目の巨人〉は、「メロー本」では第 2 巻または分冊の第 24 巻に所収されている。

【譜例 12】ラモー（「メロー本」）：〈一つ目の巨人〉1〜8 小節



【譜例 13】ラモー（「ディエメ本」）：〈一つ目の巨人〉1〜7 小節



1〜7 小節目までにおいては、曲の冒頭に書かれている Allegro、brillante、強弱記号、スラーなどフレーズの取り方はどちらも同じだが、「メロー本」では、1、2 小節目のフレーズの始まりの音や 4 小節目の装飾音の始めの音にアクセントが付けられている。

また、ディミヌエンドやクレッシェンドの指示が非常に細かく書かれている。そして、5、6 小節目の右手にはスタッカートも足されている。しかし、「ディエメ本」ではこれらは加筆されていない。

4 小節目の装飾音について、「メロー本」では実際の音符と音価が記されているが、「ディエメ本」では前打音と *tr* 記号で書かれている。

運指について、「メロー本」では要所のみ書かれているのに対して、「ディエメ本」で

はほとんど記されている。例えば、1、2 小節目の左手の運指は「ディエメ本」にのみ指示されている。2 小節目の 1 拍目に 1 番の運指が書かれているが、3 番の運指でも演奏できる。しかし、1 番にすることによって、3 番よりも 1 拍目の強拍の重さを表現することができ、次のフレーズに移りやすいとも考えられる。

このように、〈一つ目の巨人〉の冒頭部分を見ただけでも、「ディエメ本」は「メロー本」に比べ、加筆した点が少ないことがわかる。メローは、「メロー本」についての長大な解説も書いており、過去の作曲者の装飾音や表現方法を理解した上で、それをピアノで表現するための演奏法を示唆している。そのため、「メロー本」は、過去の作品を知らない人や愛好家でも、具体的な音や細かい指示を記すことによって、ピアノでどのように演奏すれば良いのかを、わかりやすく提示するものと考えられる。「ディエメ本」にも、ピアノでの演奏を想定した様々な指示が書かれているが、「メロー本」に比べると、強弱やアーティキュレーションの表記は少ない。その一方で、運指は非常に細かく書いている。ディエメは、強弱やアーティキュレーションの点では、メローよりもラモーの初版に準じていると考えることもできるが、運指の指示が細かいことから、解釈を全て演奏者に任せるというよりも、運指により表出されるアーティキュレーションを示しているとも考えられる。

おわりに

本論考では、ルイ・ディエメ編纂の『フランスのクラヴサン奏者たち』に着目した。「ディエメ本」に所収されているラモーの〈小鳥のさえずり〉と〈一つ目の巨人〉を取り上げて、ラモーの初版と「ディエメ本」の楽譜を比較し、ラモー作品におけるルイ・ディエメの編纂方針を考察した。「ディエメ本」は、【表 2】で見たように、ピアノを想定して書かれたと言える。その特徴は、現代譜に書き換えられ、初版ではほとんど書かれていない速度表記、発想記号、強弱記号、アーティキュレーション、運指が指示されていることである。また、装飾音は、ラモーの装飾音表に則って処理され、実際の音符と音価で示されたり、現代の装飾音記号と合わせて書かれている部分があった。

他方、メローの『1637 年から 1790 年までのクラヴサン奏者たち』との比較からは全体的に加筆が少なく、「ディエメ本」は、「メロー本」とは重点の置き方が異なっていることがわかった。「メロー本」刊行から「ディエメ本」刊行まで約 20 年ある。メローの歴史的演奏会をはじめとした過去の鍵盤作品の演奏機会が増え、1860 年代からはディエメやサン=サーンスらによっても過去の鍵盤作品が演奏され続けていたことや、「ファランク本」や「メロー本」の解説などで過去の作品のピアノでの演奏法が提示されたことにより、ピアノにおける過去の作品の表現方法が再考されていったことが窺える。過去の音楽に対して様々なアプローチの編纂が行われていた中で、「ディエメ本」は、「メロー本」よりも初版

から加筆の少ない方針を取った。彼が、強弱を付けることが難しく、ピアノよりも響きが少ない古楽器を使用するという先駆的役割を担ったことと、その知見を活かすことによって、ピアノにおける過去の作品の演奏法を提示していることが言えるだろう。

参考文献

○日本語文献

伊東茉帆 2022 「ラモー作品におけるアメデ・メローの編纂方針について――メロー編纂《1637 年から 1790 年までのクラヴサン奏者たち *Les Clavecinistes de 1637 à 1790*》の解説文を参考に――」『武蔵野音楽大学音楽研究』第 1 巻: 21-40

井上さつき 2009 『音楽を展示する――パリ万博 1855-1900』 東京：法政大学出版局

○欧文文献

Ellis, Katharine. 2005. *Interpreting the Musical Past：Early Music in Nineteenth-Century France.* Oxford: Oxford University Press.

Timbrell, Charles. 2001. “Diémer, Louis (-Joseph) ”. Grove Music Online. Oxford Music Online. Oxford University Press. https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/display/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000007754?rskey=UoO6CG&result=1（2023 年 5 月 10 日閲覧）

○楽譜

Diémer, Louis (Ed.). *Les Clavecinistes farançais.* 4 vols. Paris: Durand & Schoenewerk (vol. 1); A. Durand & fils (vol. 2-4), 1887-1912. (Vol.4 edited by Saint-Saëns, D’Indy, Dukas, Guilmant, G. Marty, and Th. De lajarte.)

IMSLP, s.v. “*Les Clavecinistes de 1637 a 1790 en trois volumes musique* (Méreaux, Amédée) ”, Paris: Heugel, 1864-1867. http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/a/af/IMSLP344366-SIBLEY1802.18890.14a1-39087012345965vol._2_pt._1.pdf （2023 年 6 月 27 日閲覧）

IMSLP, s.v. “*Pièces de clavecin avec une méthode* (Rameau, Jean-Philippe) ”, Paris: Boivin, 1724. http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/b/b1/IMSLP97194-PMLP19078-Rameau_-_Pieces_de_Clavecin_(1724).pdf （2023 年 6 月 27 日閲覧）